
旅途第一回

黎かな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旅途第一回

【Nコード】

N6022C

【作者名】

黎かな

【あらすじ】

世界をつくった磐琥という神が下界を見届ける。自分がつくった生き物 人でも妖怪でもないモノの生き様を見届ける。

霊根

磐琥^{いわこ}というものがいた。この世をつくったらしい。そして天界と下界をつくった。天界は彼が治めることにして下界は誰を治めるか……。悩み悩んだが決まらず下界の秩序が乱れてきたところ、閃いた。この秩序無き世界を秩序あるところに導こうとするものは、私が決めるのではない。私が決めるまでに導くのだ。私は天地を作るほどの力を持つものだが、直接手を加えては、下界を治めるものが死した時また私が決めなければなくなる。そうするときが無い。その必要をなくすために不老不死にするか？。しかしそれでは天界へくる権利ができてしまう。人間とは天界に来れる権利をもちながら、下界に居続けるような生き物じゃない。まあ来たときに下界の秩序を乱したとし、裁けばいいが、これまたきりが無い。やはり下界は下界で自然に決めたほうがいい。いや、そういう裁くのが面倒くさいとかそういう問題じゃないくて……。

時は流れ、1年後。下界も磐琥が人間にあえて植え付けた競争本能のおかげで世は急速な発展。世界は三つの皇、三皇を定め三皇が治めることになった。それぞれの皇の下に5人の部下の五帝が配置され、世界は4つの大陸に分かれた。東州、西州、南州、北州である。

傲慢の国、有名な花畑の祠に一つの石があった。その石に魂が含まれていた。磐琥が世界を作ったときにちよつと遊び心で作ったものである。人間をベースとした生き物。彼にはこれから色々なことを自分自身で吸収して貰ってもらう。人間は親から子へ知識をもらうが彼は違う。知識を得るのはここにくる者達が祠に祈りをするときに使う言語というものを吸収してもらう。非常に楽しみだ。まあだから人が来るのを多くするために、花畑を非常に美麗にしたのだ。「そろそろいいだろう。お前の生きたいように生きるがいい。その生き様。見届けさせてもらうよ。」と磐琥が言ったと同時に、下界

の満月から光が…。花畑の祠からもまた光。空中で出会ったその二つの光は踊るかのごとく回転し、一つの眩き光になった。あたりは昼にでもなったかのように光が広がった。そして、やさしい光を放つ卵が花畑に落ちてゆく…。と、そのとき、花畑の地面がうごめいた。そして地面から岩の塔が出てきた。そびえ立つバカデカイ塔。その塔に卵が降り立った。

「そうだな。まずは体の水分だな、5割以上だっけな。2日間くらいでいいか。」と磐琥が言った瞬間この世を水浸しにしてしまうのではないかというくらいの大雨。

「次は酸素。これがなきや動けええもんな。半日でいつか。」そして暴風が吹き荒れた。この二日半、だれも花畑には近寄らなかった。暴風が過ぎ去った夜。今夜は満月。光の卵にヒビ。「やっと生まれたぜ。結構美男子じゃねえか。」磐琥は微笑んだ。「始まった。スぺシャルシヨード。」

その男の子の髪の毛は伸び放題。キレイな茶色。自分の周りを見渡す。上を見上げる。満月だ。太陽の如く黄金色の満月がそこには浮かんでいた。

源流

「楽しそうじゃねえか。」

あなたのほうがたのしそうですよ磐琥、と楽しそうに笑う側近。下界の”漫才”とかいうモノをみながら爆笑してる私の横で「くだらねえ。」なんていつてるあなたがそんなに楽しそうにしてるなんてね。

数日前、例の卵が割れた。その中からかわいい顔立ちの少年が出てきた。できて早々いきなり寝た。夜だからだったのであろう。人間の本能かなんかだろう。翌朝、一人の若者が祠の近くで彼を発見して色々話かけたあげく家に持ち帰った。ここ数日毎朝見かける若者だった。

数日前あの月みたいなパツキンのヤツがオレをここに連れてきて服を着せてくれた。すっげえおいしいモンまでくれた。本当にすげえおいしかった。イタズラすんなよ、とかいつていつもふくれ顔だが、おいしいモンをくれたからきつとイイヤツつてやつだろう。今日は谷にあるカワに連れて行ってやるって昨日いつてた。カワつて何かしれねえけど、花畑より楽しいところだといつてた。時々オレにくわせている魚つてやつもいるっていつてたな。とりあえず楽しみだ。

カワにはいつぱいの水がながれてた。冷たくておいしかった。空も今日は澄んでいた。

「気をつけるよ。小僧。滝のほうには妖怪がいるからな。大人なら何とか逃げられるけどお前じゃ無理だからな。すぐ食われちまう。」といつもの顔でヤツは言った。

水遊びしながらオレは「うん。」とだけ言った。

「本当にわかってんのかよ。」とヤツが言った直後、オレは変な胸騒ぎを覚えた…。

予想どおりだった。人間とほぼ同じ容姿だが、人間ではなかった。それは明らかに人間外の何者でもなかった。たぶん…妖怪…！

「オイ！」ヤツが叫んでいた。ビビりながら…。オレはいきなりその妖怪の登場に腰を抜かしてしまった。噂をするとどうのこうのとヤツが言ってた。そのとおりだった。近づいてくる妖怪。「逃げる！」というヤツの声が谷になり響く…。妖怪は目の前に立っている…！笑みを浮かべながら妖怪は腕をあげた。…オレはシぬのか？

何が起こったかわからなかった。一瞬にして妖怪が「立っていた」場所は血の海と化した。子供の姿が消えている。どこにいった？何がどうなっている？

オレは驚愕した。眠る時以外は色々なことを記憶してきた。が、今一瞬何が起こったのかわからなかった。そう、記憶が途切れている。下流方面のほうからヤツが近づいて来た。

「オイ！大丈夫かガキ！すげえ汗ったんだぞ！」

「ワリイ、ワリイ。」とアタマを掻くオレ。襲われそうになったさっきの場所は紅で塗り散りばめられていた。あたりはすごく臭かった。

「とりあえず、一度帰るぞ。何が起こったかわからん。共食いのために妖術をほかの妖怪が使ったのかもしれない。急ぐぞ…！」

帰り道、変なチラシってヤツを拾った。ヤツに見せたら「淹つぽの妖魔は賞金首だ。首は持ちかえってきてねえし、あれはもう粉々だったから、何ももらえないさ。」といった。

その夜、ヤツに爪を切ってもらった。そしたらいきなり「何かほしいモンあるか。」といいだした。オレはすかさず「おいしいモン」と言っただ。それはいつでも作ってあるからほかのにしてみる。「そういわれても困る。おいしいモンしか頭になかった。毎日寝て食って花畑で遊んで何もほしいモンはなかった。困った…。「ネエのかよ。」と言ってきたのでなぜかわかんないけどムカついたから「

アル！」って声を裏返していつてしまった。あきれた顔でヤツは「明日の夕方までに考えておけよ。」とヤツは言い、オレは「うん」といった。

朝がやってきた。キレイなおいをした花畑のにおいが窓から入ってくる。オレは布団を飛び出し花畑の待つドアの向こうへと飛び出していった。今日はずいぶん早く起きたらしい。いつもは見ない人が祠の前にいた。女の子だった。

「こんにちわ。」とオレが挨拶したら笑って「こんにちは。」と返してくれた。

「ここらへんで見かけない子ね。どこに住んでいるの？」

「あそこ。」とヤツの家を指した。

「あたし杏^{あん}っていうの。あなたの名前はなあに？」

オレの名前？オレって誰だろう…。ヤツに教えてもらわなきゃ。

そのときのオレはヤツは何でも知っている、祠にすんでいるという神みたいなやつだとおもっていた。月色のキレイな髪をしていたからかな…。

「明日、教えてあげる。」ときびすを返しながら「バイバイ」といった。かすかだけど「バイバイ」って聞こえた気がした。

「なあ、オレの名前ってなんだよ！」ヤツは料理をしていた。

「んなの知るわけねえだろ。お前、一回もオレに言っただけなんだから。」野菜を切りながら言う。

「違って、オレ…名前ねえんだよ。」

沈黙。そしてヤツは口をゆっくりと開いた。

「しゃあねえな、お前は今日から」また沈黙。

「美琥^{みこ}だ。わかったな。」

「おう！」すげえ不思議な気持ちになった。

大変なことに気づいた。あのガキ…美琥があ妖怪を殺った。そ

れに気づいたのは昨日の夜、ヤツの爪を切っていた時だった。深紅に染まった爪の内側。花畑で血に触れる機会なんてなく、血を流す時もない。家の中でも一部屋しかない中で血を流したような時はなかった。オレは美琥がやったと確信した。

気づいた時、別に恐怖なんてそんなものはなかった。驚きとともにただ：人が聞いたら変に思うだろうがただ尊敬してしまった。あんなガキが、どこに一瞬あの妖怪を粉々にする力をもっているのか：驚きと尊敬がその時オレを襲った。だからだろうかアイツに褒美をやりたいと思った。本当は賞金首だったから金がもらえたんだ、と一人で納得する。

「今日の夕飯はなににすつか…」

ヤツの名前は慧手^{えしゅ}だった。名前をつけてもらった後に教えてもらった。「お前はオレに名前を名乗った。オレもお前に名を名乗る。」って変なことを言った。

早起きしたけど花畑に女の子はいなかった。いつものように蝶が乱れ飛んでいた。なぜかわからないけど、すぐあの女の子に名前を教えたかった。なんとしても。

「これが町かあ。人がいっぱいいるなあ。」こんな言葉でいうよりも驚いた。人がいっぱい。自分よりも大きくて前が見えない。女の子も捜せない。ここを抜け出さなくちゃ。

人ごみの中を抜け出す美琥。小さいからだのおかげで人ごみを抜け出し、住宅街にでた。

慧手の家と違って白い石みたいなものでできた家がいっぱい並んでいる。道は岩で敷き詰められていたが別に足場は悪くなかった。住宅街を風の子の文字通り風のように走りぬけてゆく美琥。一つの角を曲がった。そして美琥は足をとめた。

いた。昨日の女の子だ。大きい結構年をとっている男の人と一緒にいた。「こんにちは。」とオレは言った。女の子は何も答えな

い。一瞬目を合わせ、オレの横を歩いていった。何事も無かったかのように…。

「え。」振り向いたオレが見た女の子の姿。楽しそうに、横にいた男と歩いていった。オレは叫んだ。「杏！オレ！美琥ってんだ！杏！」杏に聞こえるようにオレは必死に叫んでいた。その努力も空しく女の子の背中には夕日の色に染められながら小さくなっていった…。

一方天界では磐琥と側近神がにらみあいながら白黒の石を並べていた。白い石を取ってゆく磐琥。

「ゲ…。」

「待ったはなしだぞ。」と楽しそうな磐琥。

俯き、歩く少年がいた。

杏はオレに気づいていた。少なくとも聞こえてたであろうに。

赤く照らされた道は美琥の悲しみを更に増させた。

こんな時間に帰ったら慧手は怒るだろうな。

慧手の家に着くころには真つ暗で月の光でやつとのこと周りが見えるくらいである。なれた手付きでドアを開き慧手がいるであろう台所に目をやったところ、美琥の目は揺れる。慧手が倒れている。

何が、あつたんだ。床を強く蹴り慧手の傍に寄る。

「おいしい！どうしたんだよあ！こんなところで寝るなよ！」震えた声
が家中に響き渡る。慧手はビクともしない。「返事しろよ！慧手！」
一筋の光が目からこぼれ出た。

とりあえず…ベッドのほうに…。

慧手はガリガリで容易に運べた。とりあえず今は誰か呼びにいか
なきゃ…！ドアに飛びつき月照らす漆黒の道へ少年は走り出した。

美琥は走っていた。慧手に何があつたかわからない。でも台所で
寝るなんて尋常じゃない。きつと気絶してしまつたんだ！

色々なことが頭をよぎる。少ししかない知識の中で一番ありえる
と思つたのは…病気であつた。絵本で見た。ネコつて男の子のおじ
いちゃんが倒れて死んでしまつた。病気になつていたらしい。では
慧手は死んでしまうのか。…そんなことはさせない、絶対に。だか
ら今やることは、イシヤを呼ぶこと。

漆黒の闇は笑っていた。いや、笑っているように見えた。この危
機的情況下ではあらゆるものが敵に見える。走る。走る。走る。飛
ぶ。いつしか美琥は飛んでいた。一つ蹴るごとに走りの速さを軽く
二倍以上をも超える飛躍。速さに目はいきついていけない。夜の冷たい
風は目を引っかけていき開けることを許されない。

何かが…。

重く鈍い衝撃は肩を貫き我が体においかぶさっていた。

「うう…」この尋常でもない速さで近づいてきた小さいものは人のように見えた。しかし人ではありえない速さ…。

「妖怪の子供…ですか…」下に視界を移動させつつ露淵ろいんは子供を抱き起き上がった。

「何なんだよ！」気づけば男を突き飛ばしていた。平然とした顔で男は呟いた。

「あなた…何者ですか。人ではない気けですしましてや妖魔の類でもない」

「何はこつちのセリフだ！何のはなしだよ！イシャよばなきや慧手は死んちまうんだ！」

「慧手…。如公が…。やはり…。そうか…。やはりあいつの子供だからか…。」

「どけよ！何ぶつぶつ言ってんだよ！」男は退く気配は完璧にない。真直ぐにオレの目に突き刺さる視線に思わず寒気を感じる。

神々しいまでの瞳をもつ男は目つきを変え言った。

「ああ…。やはり…。もうだめですよ。彼の気は完璧に消えています。死にました」

彼の言葉には一点の迷いも無く、ただただ真実だけを述べているようにしか聞こえなかった。頭の中で何回も回るその最後の一言を理解したとき、彼の、慧手の最期にオレは立ち会えなかったのだ。であった。

涙はこぼれていた。美琥の泣き声は漆黒の空、潔白の月に向かって高く響いていた。

「警琥様。今日の魂の返還数です。お確認お願いします」

女神に渡された紙を一瞥し、ハンコを押す。大きく紅で押された

印。
再生の印であつた。

慧手は：死んでしまった。寿命というもので死んだ。露淵という青年曰く慧手はこの傲慢の国の帝であったという。帝は城に住むと絵本で描かれていたので露淵に疑問を投げかけたところ彼は何も言わずそっぽを向いた。

窓から黄金が射してきた。

朝が来る：絶望の朝だ。

光は笑っていた：嘲笑だ。

オレはこれからどうすればいいのだ。料理もできなければ、洗濯もできない。

呆然といつもそこに座っていたはずの男の椅子を眺めた。

出会いは黄金の輝きだったのに。

満月浮かぶ暖かい夜。命が始まった。満月を眺め続ける少年。飽きる様子もなく、いつしか満月のまわりに紺が浸食し始めた。

朝だ。

数刻後。金髪の男は祠の前にいる少年を見ていた。

「邪魔なんだけど」

少年は振り向いた。男、慧手は困り果てた。目が訴えかけている。

「生きたい」と。

「お前さ。そこどいてくんね？」

少年に動く気配はまったくくない。

「来い」

自分でも何を言っているのかわからなかった。ただ：自分の最期にせめて、せめて誰かと幸せに過ごす時間が欲しい本能から出た言葉だったのかもしれない。孤独には慣れていただけね。

生きることだけしか考えてない黄金色の瞳と神なる黄金の髪を持つ男の出会いであった。

「おっさん。オレ、これからどうすればいいかな」

「知りませんよ。そんなの。あなた、慧手の子供ではないのですね？」

「うん」

「では用はありませんね。邪魔しました」

男は去った。

「ではお主はその子供を帝にしろというのだな」

「はい」

「お主は最高神官だがその子供にしろという理由はどこにある。先視術か？」

「違います」

男は口元で微笑んだ。「では選挙になる。皆のものの異論はないな」
広場にいる一同は一人を除いて一致する返事をした。話すこの男、最高審判は選挙でかならず帝になる。こんな男を帝にしてたまるものか。

「お言葉ですが審判。法では故帝の遺書に書かれていることは絶対ですよ？」

「なんだまだ何かあるのかね」

「彼方の負けですよ」

男の顔に余裕はなくなった。恐怖。

「遺書を読み上げます。」オレの命はもうないと思うから次のことを要請する。一に我が養子、美琥を次帝にすること。一に彼の命令は絶対の法律無視であること。一に露淵を側近につけること。んじや楽しくやってくれや。」だそうです」

周りがざわめく。今日の会議もお開きと感じたのか一人の男が広場をでていつてしまった。

「うう……。偽造だ！そんなもの偽造だ！おのれ謀反人め！引っ立てよ！」

「静かにしてください。筆跡はあなた直属の鑑定屋にしらべさせたところ一致。そのほか指紋。気も見つかりました。これは完璧に慧手故帝のもんです」

「くっ……」体に力が入らぬ……！最高審判の体は心性とともに崩れていった。

「美琥さん。こんにちわ」

露淵だ。

「何か用かよ」

慧手の死から1週間。美琥は立ち直れていなかった。が、かろうじて冷蔵庫にあった冷凍炒飯で生きてこれた。

「ハイ。貴方はこの度第5代目傲慢の国第1帝になりました」

何を言っているのかまったくわからん。「は？」

「でけえ」

城だ。

「行きますよ」露淵がぼそつという。

「なあ！絵本とかいっぱいあるのかな！」

「絵本ですか。わかりませんが普通の本ならいっぱいありますよ」

「うえ〜」

路淵とのたわいもない話。オレの心はすっかり晴れた。露淵の「慧手がみてますよ」という一言で。

「今日からここが貴方の部屋です。帝としての仕事は私が教えながらやりましょう」

「絵本どこよ」

「図書室に行ってみましょう。待ってて下さい」

露淵は床に指で円を書くようなそぶりをした。床に白く輝く円が現れ始める。

「中に入ってください」

「う、うん」

「移^{ウツ}」

場所は一点本棚しかない部屋に移る。

「今の何!？」

「移動術です」

「すげえ!どこでもいけんの!？」

見たこともないものを見た少年の目に輝きが増す。

「今度おしえてあげますよ」

露淵は微笑んだ。本棚のはるか上にある窓からこぼれる光はこの一握りの幸せを賛美していた。

「…ということで美琥は形式上^{いち}鳶家となるわけです」

「露淵は何家なの」

「^{ろえ}濾得家ですよ。エロではありませんからね」

「下ネタかよ…」

それから帝王学の授業以外の日は図書室に行った。図書室に行くための移動魔法をおしえてもらったのでいつでもいけた。

そしてある本を見つけた。

濾得^{ふない}鮎^{ふない}路^{ふない}著 不老不死の秘訣 死者甦生章

ひきつけられる様に美琥は本をめくった。最初の章にはこう記されていた。

皆さんは錬金術を知っていますね?ある種のことを種内の一定のものに変化させることで

す。これは犬や猫などで試すと異常なく甦生ができてしまいます。では、人間はどうか?現在

の法律によつて、この星でその術を人間にすると犯罪になります
が古代の本ではまったく成功

しなかったそうです。そのわけを魔術の視点で見えていきましょう。

皆さんこれを読んでおどろかないでください。不老不死の人は現在
います。

驚くだろ。オイ。美琥は部屋を飛び出していった。

「オイ側近」

「早く名前を覚えてくださいよ。もう2007年経っているんですよ？
下界時間ですけど」

「そんなことはどうでもいい。あいつはどうなった。あのふざけた
名前のえつと…」

「ファンタジーですか？まだ生きています。幽閉されながらも」

「そ。異常なしだね。ああスッパム チョ食べてえ」磐琥は大きく
あくびをした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6022c/>

旅途第一回

2011年1月27日04時50分発行